

# 川柳天守閣

2026年01月号



# 第32回例会 2025年12月15日(月) 投句締切分

## お題 「パーティ」

信子 選

政治家のパーイー券に闇がある  
栄一が飛んでるパーイー年の暮れ  
大台ヶ原から伊勢へ3人踏破  
星影のワルツで締める懇親会  
披露宴笑顔弾ける新夫婦

一品持ち寄りママ友のパーイー

幹事役花見 月見に雪見まで

寄り合いも十年経つという酒席

パーイーで乾杯前に薬飲み

ほか弁で老人会のクリスマス

百歳を祝うパーイー目標に

懐かしい顔ばかりだから夢

(五客)

佳5 間が持たずグラス重ねて悪酔いし  
佳4 パーイー中スマホの音も仲間入り  
佳3 裏金と刻み込まれたパーイー券

浜脇蓬生  
佐野正邦  
三枝なな

秋山加代子  
真鍋心平太

武智三成  
勘兵衛

青空

林ともこ  
三枝なな

浜知子  
堀内きみ子  
蔵内歳重  
秋田あかり  
松谷由夏

佳2 スパークリング一氣ひとりのクリスマス  
佳1 楽しさのあと空しさフルトップ

浜知子  
林ともこ

(三才)

人 たこパーをちょっとおしゃれにするワイン  
地 赤い実の暖簾をくぐり鳥パーイー  
天 たくさんの冬の光とダンスする  
軸 女子が寄るとティーパーイーから始まる

秋田あかり  
佐野正邦  
直子  
信子

(選評)なし

訃報

会員の小林満寿夫さんが12月9日に亡くなられました。謹んでご報告致します。

小林満寿夫さんは弁天町の句会で初めてお会いしました。「抱くことはないが好いてる明太子」などユニークな句を残されました。「川柳タケル」を主宰されており、まだまだ活躍されると思つていただけに、突然なことで大変残念です。合唱。

# お題 「影絵」

蔵内歳重 選

おなじみのヒチコックですこんばんは

長崎の死者たちが来る影法師

ボーズとる月の明かりのシルエット

モノクロの影絵父いて母がいて

ひとときの夢に浸つた影絵劇

夕日背に影絵となつてゆく家並み

狐力タツムリ影絵は遠い思い出に

幻燈に胸躍らせた幼い日

初恋の影絵はいつもサクランボ

夕日浴び木の影踊る障子越し

一コマを影絵にすると美しい

寄り添うてやがて影絵になるふたり

## (五客)

障子越し指が跳ねてる踊つてゐる

行き付いでやがて影絵になる一人

影絵見て昔の夢が走馬灯

林ともこ  
久世高鶏  
勘兵衛

秋山加代子  
秋山加代子  
青空  
浜脇蓬生  
堀内きみ子  
佐野正邦

眞鍋心平太  
平川柳  
三枝なな  
秋田あかり  
秋山加代子

佳2	人生の苦楽クルクル走馬灯	井澤壽峰
佳1	本心は影絵だらうか動き出す	直子
(三才)	"101歳"生きた証の影絵展	
人	雪模様熊の影絵が忍び寄る	波部珀兎
天	裏金も影絵のように消えて行く	武智三成
地	朝陽さす影絵中亡きボチ驅ける	岩原一角
軸	藏内歳重	藏内歳重

## (選評) 人の句

影絵作家の第1人者藤城清治氏の今も活躍中の素晴らしい業績を「生きた証」と賛辞している。メルヘンの世界から戦争や災害にも向き合ひ、生きる喜びを描いた影絵は最高だ。

## 地の句

猛暑でどんどんぐりの生育が悪く、餌不足で町に現れ危害を加えている熊。冬眠もせず空腹のまま彷徨う熊の影絵が障子に映れば怖ろしい」とだろう。時宜を得た句だと思つ。

## 天の句

「政治とカネ」の問題が究明されぬままに消えていくそな現状を「影絵のように消えていく」と憂えている。国民の多数が同様に感じている。



# お題 「音色」

互選

1点

銅鐸の音色楽しむ古代人  
メイドイン・ジャパン扇子で仰ぐ音  
音楽会静かな音にコックリコ  
焼く音で国産豪州米国産

加山勝久  
春田敏晴  
青空

2点

全集をめぐれば三味の音がする  
三重奏ゆつくり聞こう十二月  
五人の子音色の違つ音符持つ  
春の海流れて車中年変わる

信子  
春田敏晴  
真鍋心平太

山野寿之  
三枝なな  
松島きよみ

午後のティー胎児と聞きしクラシック  
習いたてトランペットに気が狂い  
美しい音色の爆ぐクリスマス  
町じゅうに心浮きたつ太鼓の音  
たましいの音色で愛を語る蝶  
補聴器で違つた音色裏悲し

高山勝久  
林ともこ  
蔵内歳重  
加山勝久  
平川柳  
勘兵衛

山野寿之  
浜知子  
井澤壽峰  
佐野正邦  
岩原一角

別れた日風の音色が薄れ行く  
チャルメラの音色小腹が空いてくる  
優しい聲音人柄までも優し気に  
君の声恋だつたのと氣付く夜  
鉢虫の音色ひと夜の夢の宴  
それぞれの音色奏でる孫4人  
帰らねばゆうやけこやけ残る脳  
聖者たち音色途絶えたウクライナ  
豆腐屋の笛が聞こえた昭和路地  
管弦の音色操る名タクト  
美しい音色やつぱり小判かな  
雪ん子の白い音色に包まれる  
空は青秋の音色になるかえで  
あきらめてたどりしんしんと雪の音  
讃美歌の音色優しくイブの雪  
静寂がふと気付かせる雪の音  
故郷の音色が匂う宅急便  
年輪を重ねて深まりゆく音色

久世高鶯  
浜知子  
青空  
秋山加代子  
堀内きみ子  
松島きよみ  
浜脇蓬生  
平川柳  
林ともこ  
直子  
浜脇蓬生  
堀内きみ子  
松島きよみ  
浜脇蓬生  
秋山加代子  
真鍋心平太

4点

一言の音色優しい友の愛  
聖者たち音色途絶えたウクライナ  
豆腐屋の笛が聞こえた昭和路地  
管弦の音色操る名タクト  
美しい音色やつぱり小判かな  
雪ん子の白い音色に包まれる  
空は青秋の音色になるかえで  
あきらめてたどりしんしんと雪の音  
讃美歌の音色優しくイブの雪  
静寂がふと気付かせる雪の音  
故郷の音色が匂う宅急便  
年輪を重ねて深まりゆく音色

久世高鶯  
浜知子  
青空  
秋山加代子  
堀内きみ子  
松島きよみ  
浜脇蓬生  
平川柳  
林ともこ  
直子  
浜脇蓬生  
堀内きみ子  
松島きよみ  
浜脇蓬生  
秋山加代子  
真鍋心平太

5点

豆腐屋の笛が聞こえた昭和路地  
管弦の音色操る名タクト  
美しい音色やつぱり小判かな  
雪ん子の白い音色に包まれる  
空は青秋の音色になるかえで  
あきらめてたどりしんしんと雪の音  
讃美歌の音色優しくイブの雪  
静寂がふと気付かせる雪の音  
故郷の音色が匂う宅急便  
年輪を重ねて深まりゆく音色

久世高鶯  
浜知子  
青空  
秋山加代子  
堀内きみ子  
松島きよみ  
浜脇蓬生  
平川柳  
林ともこ  
直子  
浜脇蓬生  
堀内きみ子  
松島きよみ  
浜脇蓬生  
秋山加代子  
真鍋心平太

6点

豆腐屋の笛が聞こえた昭和路地  
管弦の音色操る名タクト  
美しい音色やつぱり小判かな  
雪ん子の白い音色に包まれる  
空は青秋の音色になるかえで  
あきらめてたどりしんしんと雪の音  
讃美歌の音色優しくイブの雪  
静寂がふと気付かせる雪の音  
故郷の音色が匂う宅急便  
年輪を重ねて深まりゆく音色

久世高鶯  
浜知子  
青空  
秋山加代子  
堀内きみ子  
松島きよみ  
浜脇蓬生  
平川柳  
林ともこ  
直子  
浜脇蓬生  
堀内きみ子  
松島きよみ  
浜脇蓬生  
秋山加代子  
真鍋心平太

15点

豆腐屋の笛が聞こえた昭和路地  
管弦の音色操る名タクト  
美しい音色やつぱり小判かな  
雪ん子の白い音色に包まれる  
空は青秋の音色になるかえで  
あきらめてたどりしんしんと雪の音  
讃美歌の音色優しくイブの雪  
静寂がふと気付かせる雪の音  
故郷の音色が匂う宅急便  
年輪を重ねて深まりゆく音色

久世高鶯  
浜知子  
青空  
秋山加代子  
堀内きみ子  
松島きよみ  
浜脇蓬生  
平川柳  
林ともこ  
直子  
浜脇蓬生  
堀内きみ子  
松島きよみ  
浜脇蓬生  
秋山加代子  
真鍋心平太

得点があるものをすべて点数順に掲載しています。

## お題 「寒」短句

互選

1点	木枯らしの音ヒューヒューと鳴る 庭で咲き散る寒椿良し 寒気極まり降雪しきり 起床早める夜半から雪 ジングルベルを聞きつつ献血 日だまり求め寒い日散歩 凍て星みつけほろ酔いの僕 おでん待ってる寒い日の爛 忘れずに来たのは寒気団 雨戸ガタガタ夜寒が迫る 冬の夜空を見上げため息 灼熱の身に突如冷水 サウナ醍醐味雪原ダイブ 悪寒ぞくぞく玉子酒呑む 寒い冬空星は輝く 寒い一言背中が凍る 工アコンよりもストーブ温い 雪をも溶かす億シーベルト 寒くてもいい深く潜ろう ぎゅつとマフラー急かす寒空 母の背に重なる寒椿	松谷由夏 井澤壽峰 三枝なな 浜脇蓬生 山野寿之 林ともこ 松谷由夏 山野寿之 信子 三枝なな 久世高鶏 蔵内歳重 松島きよみ 浜知子 東尾由子 堀内きみ子 青空 春田敏晴 直子 林ともこ 秋田あかり 秋田あかり 堀内きみ子
2点	3点	

4点	寒風の中愛燃え上がる 家路を急ぐ木枯らしの中 プログラミングで鳴る寺の鐘	浜知子 山野寿之 真鍋心平太	
5点	寒風に耐え春待つ試練 背筋も凍るオジョーサンの笑み		
6点	着膨れの子ころげ雪ダルマ 冷えた心で逆転の夢	浜脇蓬生 松島きよみ 平川柳 春田敏晴	
7点	バレンタインのお返事は雪 空腹に冬眠れない熊	直子 東尾由子 秋山加代子 波部珀兎	
8点	荒れた庭先寒椿咲く 寒波に地震二重の苦難	蔵内歳重 秋山加代子 波部珀兎 秋山加代子	
9点	寒波恐れぬ私の脂肪		
10点	寒さ吹き飛ぶ嬉しい便り	直子 東尾由子 秋山加代子 波部珀兎 秋山加代子	
今月の投句者（26名 敬称略）		<b>太字は初参加の方です。</b>	
三枝なな	久世高鶰	井澤壽峰	佐野正邦
信子	加山勝久	勘兵衛	堀内きみ子
山野寿之	岩原一角	平川柳	青空
春田敏晴	東尾由子	松島きよみ	松谷由夏
林ともこ	武智三成	波部珀兎	浜知子
浜脇蓬生	直子	秋田あかり	蔵内歳重
秋山加代子	真鍋心平太		
皆様ご参加、ご協力ありがとうございます。			

川柳天守閣 連載 評論「現代川柳の詩学」を考える ㉔

荻原井泉水の「自由律」俳句と井上剣花坊の「川柳民衆藝術論」

十八世川柳宗家 閑成庵川柳 平川柳(東京川柳会主宰)  
剣花坊の「川柳民衆藝術論」にはホイットマンの「民衆詩」の影響が強くみられますが、勝五郎の「短詩」にも、こうしたホイットマンの『草の葉』の影響が強く認められます。

大正八年に剣花坊は『川柳を作る人に』でホイ

ットマンを民衆詩人として取り上げ、「川柳一呼

吸詩論」と「川柳民衆芸術論」を提唱しましたが、同じ年に俳句の世界でもこの年に自由律俳句作家の荻原井泉水(おぎわらせいせんすい)（一八八四－一九七六）は自由律俳句誌『層雲』(六月号)で「ホイットマンと芭蕉」と題するエッセイを発表しています。

剣花坊は一九一〇(大正九)年十一月に発行された『大正川柳』(百号記念号)で「新川柳に対する私の主義主張」を次のように述べています。

「私の主義は、平民政義です。自由主義です。人間としては（中略）貴賤の差別はない、という簡単な主義です。（中略）私の新川柳に於て持つてゐる主義が、ヤハリ、この自由主義、平民政義であつて、私が今日、新川柳どこまでも最も徹底した民衆芸術にしやうという主義が、決して一朝一夕に生じたものでないことを御話する必要があると思ふたからです。」

また「最も民衆に近い民衆詩人」の例としてホイットマンをあげ、次のように述べています。

「米国のホイットマンは、近世唯一の世界民衆詩人です。しかし路傍の草の葉にチラチラ見える花にも大なる愛を持つといふ彼の民衆に同情ある詩も、彼の如き、大詩人にならなければ歌はれません。するとやはり、他の多く民衆は、この大詩人を待つてはじめて自分を表現することになるのです。」

剣花坊はこの文で「近世唯一の世界民衆詩人」であるホイットマンに尊敬の念を示しています

が、「大詩人」がいなければ、自らを表現することができないことに不満をもつています。

### ●剣花坊の川柳における「民衆藝術論」の展開

剣花坊は、次のような「民衆藝術論」を展開します。

「民衆は自ら歌ふことができず、歌えば必ず他の大詩人の歌つた詩を歌つて満足する、といふのではどうももの足りません。民衆の誰も彼もが悉く詩をつくり、さうして自分のつくつたものを自分で歌ふのが当然だと思ひます。否、それが眞に民衆藝術、民衆詩といふものだらうと考へるのです。」

剣花坊は「眞の民衆藝術」や「民衆詩」は「民衆の誰も彼もが悉く詩をつくり」、「自分のつくつたものを自分で歌ふ」ものだらうと考えています。

川柳革新運動の第二期である『大正川柳』の時

代の「新川柳」は「大正デモクラシー」と「大正生命主義」の時代思潮が反映されています。

この時代の剣花坊は、明治時代に比べて「古川柳」の理解を深め、一九二六（大正十五）年二月には白石維想樓編で川柳研究叢書第一編として『古川柳真髓』（柳樽寺川柳会発行）を出版しています。

剣花坊は「民衆詩派」の詩人・三石勝五郎からアメリカの民衆詩人ホイットマンの『草の葉』の「民衆詩」を教えられ、「川柳一呼吸詩論」と「川柳民衆藝術論」を展開し、「世界文学」と明治時代の「新川柳」を比較文学の視座から論じます。

この時代に剣花坊は、大正時代の社会の底辺で生きる人々を描いた「社会詠」の「民衆藝術」としての「新川柳」と詩情豊かな「一呼吸詩」としての次の「新川柳」を発表しています。

老車夫の喘ぐ後に昼の月

剣花坊

（続く。）

# 「肩たたき券」

真鍋心平太

券の代価は肩たたきではなく、  
その時間、その視線、その一生懸命さだったのだと、今な  
ら分かる。

「引き出しの奥を探していたわけでもない。

ふとした拍子に、古い封筒から一枚、色あせた紙切れが  
滑り落ちた。

赤や青の線がいびつに踊り、角は少し丸くなっている。

「肩たたき券」と、たどたどしい文字で書かれていた。

もう使うことはない。

そう分かつていても、捨てる理由も見当たらない。

この券は、効力を失ったのではなく、役目を終えただけ

なのだ。

あの頃、肩を叩く小さな手は、力もリズムも覚束なか  
つた。それでも叩かれる側は、妙に誇らしく、そしてく  
すぐつたかった。

## まだあるよクレヨンの肩たたき券

クレヨンで描かれた線には、迷いがある。  
けれど迷いは、真剣さの裏返しでもある。

失敗してもやり直せると信じていた頃の、  
世界との距離感が、そのまま残っている。

気がつけば、肩を叩く側と叩かれる側は、  
静かに入れ替わっている。

それでも、この券は失効しない。

過去から現在へ、無言のまま効き続けている。

引き出しを閉める。券はそこに戻る。  
「まだあるよ」と、じりじりと言ひ残すように。

思い出は、使い切るものではない。  
しまい直しながら、少しずつ効いてくるものなのだ。

# 第33回 ウェブ川柳天守閣 ご案内

お題 「ゼロ」 秋田あかり 選  
「手袋」 佐野正邦 選  
「鼓動」 互 選  
「雑詠」 真鍋心平太 選  
「霜」(短句) 互 選  
(投句 各 2 句)

**投句料 3回につき 1000 円**

(請求書メールが届いたらお支払い下さい。)

投句開始 2026年1月9日（金）から

投句締切 2026年1月15日（木）まで

互選投票 投句締切後下記の期間内に投票して下さい。

1月16日（日金）～1月19日（月）

披講発表 1月20日（火）から隨時閲覧可能になります。

左記の投句、互選投票、結果発表の閲覧は  
下記 URL から可能です。  
<https://tensyukaku.com/>

投句、互選投票は会員登録が必要です。  
会員登録は下記 URL より  
[https://tensyukaku.com/id\\_make.php](https://tensyukaku.com/id_make.php)

スマホは下記 QR コードから



投句・閲覧

会員登録

一〇一五年十一月二五日発行

**ウェブ川柳天守閣会報**

(発行責任者 真鍋心平太)

(編集人 真鍋心平太)

(事務所)

〒 520-0054

滋賀県大津市逢坂一丁目8-1

サンルシエル大津607号室

川柳天守閣

携帯 TEL · fax  
080-077(532)4211  
080-(2672)4446

フォト川柳

クリックで拡大